



「ターヘル・アナトミア」展(2006年8月5日~27日 会場:東京ワンダーランド)にて

自我に目覚め、大人への階段を上り始める中学時代。不安定で、“生き心地”に違和感がある。そんな状況を、強い意志と表現力でぶち破る少年がいる。「ナマヌルイ世界でもその空気に負けんよう自分の空気を持っていたい」。大阪市在住の林俊作君は弱冠14歳にして、飄々と独自の道を歩む。

創作は日常の一端

イラストレーターの父親の画材道具に囲まれて育ち、幼い頃から「絵を描く」ことが日常だった。7歳の頃にはコンピューター・グラフィックス(CG)を覚え、表現の幅をぐっと広げる。各種コンテストに出品するや次々と賞を獲得。その才能に父親も目を見張った。

中学に入ってから「一つに絞らな、全部中途半端になるかなって思って」とサッカーを止め、創作活動一筋に。たまには友達と外で遊ぶこともあるが、学校から帰ったら「ほとんど毎日、描いたり作ったり」。

ペンや絵の具、パソコンなど創作道具は表現したいもので使い分ける。手法にも縛られることなく、「いろんなことをやって一番いい表現方法で作っていく」。自然体で、自由な創作が基本だ。

「技術の勉強はもういいかなと思う。それよりも他のことに挑戦していきたい。いろんな手法でぐるぐる回してやっているとおきないし、楽しいことがいっぱいある」。

CGの大作や線画、アニメーションなど気張ることなく生まれてきた作品は、展覧会などで披露。先月は大阪・梅田のHEP HALLで3回目の個展「爪で歩く者」を開き、独特の世界観で来場者に衝撃を与えた。

感性の赴くままに

日光東照宮、モン・サン・ミッシェル、ティム・バートン、アントニオ・ガウディ、シケイロス、ヤン・シュヴァンクマイエル、ゼウス、メドゥーサ、ミノタウルス、蜘蛛(クモ)、ギリシャ神話…。「僕の好きなもの」としてあげる建造物や人物などだ。日々増殖している。

これら興味を持ったものからイメージを膨らませ、画に向かう。平成18年度文化庁メディア芸術祭で奨励賞を受賞した「サグラダ・ファミリア計画」はスペインの建築家・ガウディの特集をテレビで見たのをきっかけに取り組んだ大作である。

一つの作品を完成させるには根気も必要だ。「描かないとイメージも出てけえへんようになると思うから、どんどん描く。頭の中の図でやっていたらそれに縛られちゃうから嫌。もっと自由に、そんな時そんな時の気持ちで描いていく」。

4月には待望の画集『心臓とダチョウの羽』(リトルモア社発行)を刊行。夢が1つ叶うと、また新しく夢が生まれる。さらに大きな壁画やストップモーションアニメ映画の制作、大好きなティム・バートン監督との仕事…あふれる夢こそ原動力である。

「<今>をやらなければ、夢の実現はやってこない」。個展会場に掲げた力強い言葉は、一人歩きしていない。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

”今” “を生きる” 14歳の 気鋭アーティスト

プロフィール

画家

はやし しゅん さく
林 俊作さん



1992年大阪生まれ。第13回国連子環境ポスター原画コンテスト最優秀賞(04年)、東レデジタルクリエイション アワードジュニア部門最優秀賞(04、05年)、CG-ARTS協会学生CGコンテストU-18賞(05、06年)、第10回文化庁メディア芸術奨励賞(07年)など受賞。初めての個展は06年「画様TERRO」(大阪梅田・HEP HALL)。